ＢＣＣ 友の会だより №30

（2015 年 12 月 21 日発行）

自転車文化センター
〒141-0021　東京都品川区上大崎 3-3-1
TEL 03-4334-7953 / FAX 03-4334-7958
Email　bccask@jifu.jp
OPEN　9:30~17:00（最終入館 16:45）
CLOSE　月曜日(祝日の場合は翌平日)・年末年始

≪2016ハンドメイドバイシクル展≫

平成２７年度企画催事下記により開催いたします！

◆開 催 日　：　平成２８年１月２３日(土)・２４日(日)
◆開催会場　：　科学技術館１階催事場【１号～４号催事場：東京都千代田区北の丸公園２-１】
◆開催時間　：　午前９時３０分から午後４時５０分
◆入 場 料　：　無料
◆展示内容　：　自転車文化センターが、毎年恒例として開催している「ハンドメイドバイシクル展」。今年度は、出展社数４４社、高い技術をもったビルダーによる国内外メーカーの「独自性にあふれる自転車」並びに、斬新かつ新機構を取り入れた「独創性の高いパーツ」等を展示。また、開催中ビルダーによる「トークショー」・「ハンドメイドバイシクルはどのように作られるのか！？」をテーマにパネル・工具などの展示と、様々な企画を予定しております。皆様のご来場お待ちしております。

～2015 ハンドメイドバイシクル展の様子～

～平成２７年度第４回テーマ展示予告～

『ハンドメイドバイシクルの魅力展』開催

■開催期間　：　平成２８年１月１４日（木）～3月 31 日（木）まで
■開催場所　：　ＢＣＣライブラリー・ギャラリー内
■開催内容　：　「ハンドメイドバイシクルのしくみ」、当センター所蔵の「歴史的なハンドメイドバイシクルの名車」などの展示等、世界に１台だけの自転車を創るハンドメイドバイシクルの魅力をお楽しみ頂ける内容となっております。

寄贈資料の紹介

・山内英司様（神奈川県）　『軽快車と男性二人』写真　１点

自転車文化センターでは、寄贈された貴重な資料を大切に保管し、テーマ展示等を通じてご覧いただける機会を設けております。

新着図書のご案内

「MOUNTAIN BIKE ACTION vol.30-8」
「自転車通行を考慮した交差点設計の手引」（交通工学研究所）
「ゼロからはじめるロードバイクメンテナンス～老舗専門ショップが教えるメンテナンスのコツ」（フレンド商会　著／つちや書店）
「「弱虫」でも強くなる！ひとつ上のロードバイク(プロ技)メソッド」（山崎敏正　著／ＳＢクリエイティブ）
「ロードバイクテクニック教化書」（枻出版）
「ロードバイクスタートＢＯＯＫ改訂版～買い方、乗り方、メンテナンスロードの基本エイムック」（枻出版）
「折りたたみ自転車＆スモールバイクライフ～２０１５タツムック」（辰巳出版）
「敗者たちのツール・ド・フランス～ランタン・ルージュ」（マックス・レオナルド・安達眞弓　著／辰巳出版）
「ＭＴＢ日和初心者もベテランもみんなで走れば山はもっと楽しい！」Vol.23(辰巳出版）
「バイシクル・フォト・マガジン特集：自転車とカメラと旅に出る～vol.02～「自転車」に乗りたくなる、「写真」が撮り玄光社 mook」（石川望　著／玄光社）
「ゼロから始めるロードバイクの本～乗ってみたい！エイムック」（枻出版社）
「LOOP Magazine WORLD STREET BICYCLE SNAP vol.19～サンエイムック」（三栄書房）
「MOUNTAIN BIKE ACTION vol.30-9」
「自転車日和 37～タツミムック」（辰巳出版）
「LOOP Magazine WORLD Made in USA vol.18～サンエイムック」（三栄書房）
「弱虫ペダル 41 巻」（渡辺航　著／秋田書店）
「ロードバイクをはじめよう」（スタジオタッククリエイティブ）
「これで競輪のすべてがかわる～競輪は KEIRIN に変わったサンケイブックス」（阿部道　著／三恵書房）
「エスケープ～2014 全日本選手権ロードレース」（佐藤蕎 著／辰巳出版）
「クロモリロードバイクの本～エイムック」（枻出版）
「自転車日和 24～タツミムック」（辰巳出版）
「土井雪広の世界で戦うためのロードバイク・トレーニング」（東京書籍）
「MOUNTAIN BIKE ACTION vol.30-10」
「かわうその自転車屋さん１」(こやまけいこ　著／芳文社)
「かわうその自転車屋さん２」(こやまけいこ　著／芳文社)
「MOUNTAIN BIKE ACTION vol.30-11」
「スポーツ自転車でまた走ろう！」(山本修二　著／技術評論社)
「自転車日和 38」(辰巳出版)

「ＢＣＣ友の会」会員募集中♪

自転車に関する書籍など、約 9000 冊を所蔵しています。会員登録をしていただいた方に限り、図書の自由閲覧をすることができます。
会員各位におかれましては、ご友人様などご紹介頂けたら幸いです。

「ＢＣＣ友の会１日利用システム」♪

現在、みなさまにもっと当センターを活用して頂きたく【１日ご利用システム】を設置しております。
是非、ご利用してみてはいかがでしょうか!?
ご利用の詳細は、ＢＣＣＨＰ又はＢＣＣまでお問い合わせ下さい。

＜ＢＣＣ休館日のお知らせ＞

★月曜日休館(祝日は開館し翌平日が休館となります)

1 月 12 日(火)・13 日(水)[臨時休館]・18 日・25 日

2 月 1 日・8 日・15 日・22 日・29 日

※年末年始休館日　12 月 28 日～1 月 4 日迄

自転車文化センターにご来館の際は、必ず会員証をカウンターまでご提示くださいね♪

科学技術館入館チケット（招待券）プレゼント！

科学技術館（千代田区北の丸公園）「２Ｆ自転車広場」には、当センター所蔵の歴史的自転車などの常設展示を引き続き行っております。ぜひお立ち寄りください。

♡友の会会員の方に科学技術館入館チケット(招待券)を先着 10 名様（お一人様２枚まで）に差し上げます。
自転車文化センター(目黒)にご来館のうえ、インフォメーションカウンターまで、お申し出ください。

明治２９年に行われた２つの自転車ロードレース

ＢＣＣ学芸員　谷田貝一男

１．はじめに

明治２９年１２月２６日に横浜～国府津間で行われた自転車のロードレースの内容について、「友の会だより」第１９号（２０１１年９月発行）で紹介しましたが、これに加筆してさらに詳しい内容を「茅ヶ崎市史研究・ヒストリアちがさき」第４号（２０１２年３月　茅ヶ崎市発行）に掲載しました。この後、松島靖幸氏より同年２月にもロードレースが行われたという情報を頂きました。そこで、今回はこの２月に開催されたレースの内容を紹介し、併せて１２月のレースとの対比も行ってみました。

２．２月に開催されたレース

レースの様子は「日本」第２３１４号（明治２９年２月１０日発行）と「THE JAPAN WEEKLY
MAIL」１８９６年２月１５日号に掲載されています。この２紙の内容をまとめると以下のようになります。

レースは横浜の山下居留地１０番地のヌカサーが主催したもので、２月８日土曜日午前９時に横浜停留所（現在の桜木町駅）をスタートして、国府津をゴールとする３３マイル（約５３キロ）のコースです。事前の参加申込者は９名、レース参加者は６名、完走者は３名でした。

優勝　L.Eyton　（山下居留地５４番館）　１時間５８分
Rambler 自転車に乗車

２着　S.N.Kuhn　（山下居留地１９５番館）　２時間３分２５秒
Crescent 自転車に乗車

３着　H.A.Poole　（山手居留地８９番館）　２時間１３分
Columbia 自転車に乗車

途中リタイヤしたのは H.F.Arthur、E.Adet、J.M.Scott の３名でした。H.F.Arthur は戸塚を通過する前にチェーンが切れてしまいました。１２月のレースでも保土ヶ谷の丘といわれている所でチェーンが切れて１名がリタイヤしています。両者とも同じ権太坂付近と思われ、坂を上る際に切れてしまったのでしょう。

E.Adet は藤沢を通過した後、橋の上で前方を行く農夫の引く荷車を避けようとした際に農夫と衝突してしまいました。J.M.Scott はスタート前かスタート後か、何らかの原因でリタイヤしています。

３．レースで使われた自転車

完走した３名が使用した Rambler、Crescent、Columbia の各自転車はいずれもアメリカ製です。

写真 1 は H.A.Poole が使用した COLUMBIA FACTORY 製とは異なりますが、３５年の COLUMBIA FACTORY 製カタログに掲載されている MODEL83 型で、ロード・トラック兼用のレーサーです。主な仕様サイズは重量２１ポンド（約９.５キログラム）、ホイールベース４３インチ（約１０９センチメートル）、フレーム高２１インチ（約５３センチメートル）、車輪径２８インチ（約７１センチメートル）、ヘッド径１　インチ（約３.５センチメートル）、メインチューブの直径１インチ（約２,５センチメートル）です。

３５年に発行された松居眞玄著「自転車全書」には「明治２９年時分には主にクリーブラン

ド、デートン、クレセント、コロンビア、ストーマア、アメリカントラベラーというような車が来ていた」と記述されています。１０年代には居留地内に自転車の輸入販売を行う店もあり、２６年において居留地内で営業していた６３９業者の２７.６％に当たる１７７業者が貿易業に携わっていましたので、レースに参加した選手たちはこうした販売店や貿易関係会社を通じて自転車を入手していたと考えられます。

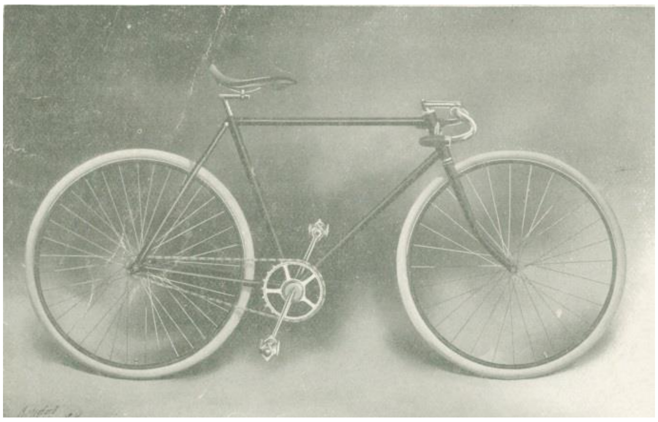
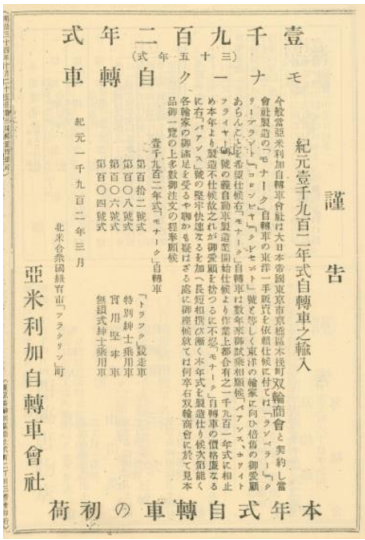


写真１　COLUMBIA HARTFORD AND VEDETTE BICYCLES 1902 カタログより

写真２は３５年に発行された「輪友」第５号に掲載された広告です。この広告を読むと、Columbia・Crescent・Rambler などは東京の双輪商会を通してすでに広く販売されていることが分かります。



壹千九百二年式
（三十五年式）
モナーク自轉車

謹告

紀元壹千九百二年式自轉車之輸入

今般當亞米利加自轉車會社は大日本帝國東京市京橋區木挽町双輪商會と契約し當會社製造の「モナーク」自轉車の東洋一手販賣を依頼仕候に付ては「ランベラー」「クリーブランド」「コロンビヤ」「クレセント」號と等しく東洋の輪家に向ひ倍舊の御愛顧あらんことを希望仕候右「モナーク」自轉車は數年來御試乘相願候「バアンス、ホワイトフライヤー」號の義自動車製造業開始仕候より作業上都合有之一千九百一年式に相止め本年より製造不仕候故之れが御愛顧を捨つるに不忍「モナーク」自轉車の價格廉なるに右「バアンス」號の堅牢快速なるを加へ長短相撰び漸く本年式を製造仕り候次第能く各輪家の御満足を受るや聊かも疑はざる處に御座候就ては何卒右双輪商會に於て見本品御一覧の上多數御注文の程奉願候

壹千九百二年式「モナーク」自轉車

第百拾二號式	「トラック」競走車
第百〇八號式	特別紳士乘用車
第百〇六號式	實用堅牢車
第百〇四號式	無鎖式紳士乘用車

紀元一千九百二年三月

北米合衆國紐育市「フランクリン」町

亞米利加自轉車會社

本年式自轉車の初荷

今般当亜米利加自転車会社は大日本帝国東京市京橋区木挽町双輪商会と契約し当会社製造の「モナーク」自転車の東洋一手販売を依頼仕候に付いては「ランベラー」「クリーブランド」「コロンビア」「クレセント」号と等しく東洋の輪家に向ひ倍□の御愛顧あらんことを希望仕候

写真２　亜米利加自転車会社は Columbia 自転車の販売を担当した AMERICAN CYCLE MANUFACTURING CO.です。（輪友第５号より）

４．レース主催者

レース主催者である山下居留地１０番地のヌカサーとは誰なのか、１０番地という住所とレースが開催された１８９６年という年代から調べたところ、MacArthur & Co.というイギリス系の輸出入貨物の荷役・通関手続きの代行・運輸等を行う会社であることがわかりました。１８８６年刊の「日本絵入商人録」に店舗の図が掲載されており、そこには「SHIP BROKER CUSTOMS' & LANDING AGENT　船舶荷物問屋」と記されています。

ヌカサーとはマッカッサーのことで、１８７９年に居留地１７９番で営業を開始し、１８９２年から１０番に移転し、１９１９年まで営業を行っていました。

５．１２月２６日のレースとの比較

◎コースについて

２月８日は横浜停留所から国府津まで、１２月２６日は国府津停留所から横浜までと記載されています。１２月の優勝タイムが２時間７分、２着が２時間１１分１５秒で２月とほぼ同じことから、２回のレースは横浜停留所と国府津停留所間の東海道を使った同じコースと考えられます。

当時の東海道は地域によって、幅員が４間（約７.３メートル）の第一国道と３間半（約６.４メートル）の第二国道に分かれていますが、いずれの地域も舗装はされていません。しかし、路面は砂および砂利で固められていたことから、「THE JAPAN WEEKLY MAIL」は概ね良い状態であったと述べています。

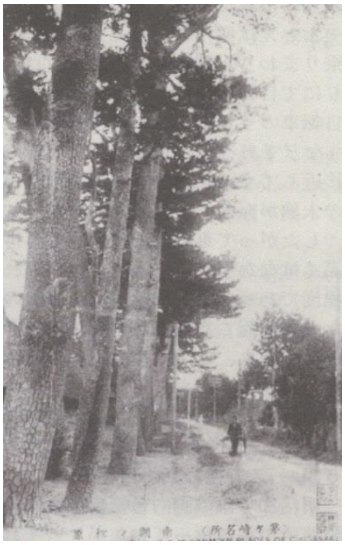


写真３

図１

写真３は明治末～大正期における茅ヶ崎市の南湖付近の東海道で、中央右下に荷車を引く男性が写っています（茅ヶ崎市役所所蔵）。L.Eyton がリタイヤの原因となった衝突の相手の農夫もこうした姿で通行していたのでしょう。図１には２月と１２月の各レース中に発生した出来事とスタート・ゴール地点を記入しています。

◎出場者

２月６名、１２月４名のうち両レースに出場しているのは L.Eyton と J.M.Scott の２名です。２月の優勝者 L.Eyton は１２月では２着、２月にリタイヤした J.M.Scott は１２月に優勝しています。

２回のレースに出場した８名の選手の中で、J.M.Scott は松居眞玄著「自転車全書」（明治３５年発行）の中で「横浜にいる６名ほどの自転車チャンピオンの中でも何時でも頭角を争っていた」といわれていた選手で、２９年５月に居留地内のグラウンドで開催された大会において、１マイルレースで２着、５マイルレースでは優勝しています。また３１年１１月６日に上野不忍池畔で開催された内外連合自転車競走運動会では１マイルレースで２着、５マイルレースで優勝しています。

また、E.Adet は２８年１２月に居留地内のグラウンドで開催された大会の２マイルレースで優勝、２９年５月の大会の３マイルレースで２着に入っています。H.A.Poole は２８年１２月の２マイルレースで２着に入っています。

その他、L.Eyton と S.N.Kuhn に関して、他のレース結果は不明ですが、住所から所属会社がわかりました。L.Eyton は横浜で最初の外国商として開業したドイツ系総合商社 Iilies & Co.

の、S.N.Kuhn は横浜居留地屈指のアメリカ系総合商社 Issacs & Brother の社員でした。

◎農夫との衝突と警官配置の関係

明治２９年１２月２６日に横浜と国府津間でロードレースが開催されたという記録が見つかったのは、２０１１年９月に開催された「貞奴とその時代の自転車展」の主催者「川上音二郎没後１００年・川上貞奴生誕１４０年記念事業実行委員会」の委員の方から、茅ケ崎市が発行している『明治の巡査日記－石上憲定「自渉録」』の中に自転車レースに関する記録があることを教えていただいたことがきっかけでした。この日記には「１２月２６日午前１０時に国府津を出発する自転車競走があるので、東海道の取締りを行う」との記述があり、「THE JAPAN WEEKLY MAIL」１８９７年1月２日号には「レースを円滑に行うために通過する町で交通整理が行われ、沿道の特に人口の多い箇所では巡査が配置された」という記述があります。このときはまだ２９年２月のレースに関する情報が入手出来ていませんでしたので、自転車のロードレースが皆無であった時代になぜ事前に巡査が各地で配置されたのかは不明でした。このため、茅ヶ崎市史研究・ヒストリアちがさき」誌では次のような推測をしました。

> レース当日（２９年１２月２６日）の東海道の利用状況を考えてみると、中心は歩行者、荷車で、その間に自転車、人力車、荷馬車が通っていたといえる。しかし、この当時歩行者や各種車両と自転車との事故が少なくはなかった。
>
> たとえば明治２７年から２８年の新聞記事によると「神田小川町界隈で自転車の乗りまわりが盛んに流行し（歩行者にとっては）危険千万である」「神田一橋通りにて自転車が馬車と接触して大けがをした」「秋葉原で並進してきた２台の自転車のうちの１台が対向してきた人力車と突き当たり、転倒して大けがをした」などである。いずれも自転車の存在が十分に認識されていないため自転車が接近しても避けようとしない場合が多かったことと、自転車利用者の運転技術の未熟が原因であった。
>
> したがって東海道を往来する歩行者や荷車なども自転車の存在意識は決して高くはなかったであろうと推察される。しかも当時の自転車の速度が７～８キロ程度であったので、時速１３～１５キロのレース用自転車が往来の中に飛び込んで来たときの起こり得る事態を鑑みるならば、事前・直前の注意喚起を促すのは必然ともいえ、このために巡査が配置されたといえる。

この推測通り、２月のレースで選手と農夫が衝突するという事故が発生し、レースをリタイヤしていることから、１２月のレースでは予め巡査が要所に配置されたと考えられます。この巡査が配置されたのは鶴嶺村（現在の茅ケ崎市）中島としか日記には記載されていませんが、民家が立ち並んでいた現在の新田入口交差点付近であろうと推察されます。この地点は相模川の東側ですから、農夫と衝突した橋の上とはこの相模川にかかる馬入橋と推察できます。

◎賞金

１２月のレースでは優勝者にアメリカの Dayton 自転車提供で５０ドル、２着に神戸の Collins 提供で２５ドルが贈られています。2月のレースについては賞金に関する記述がないため、なかったと考えるとこのレース開催実績を見て１２月のレースに賞金が用意されたのかもしれません。すると、２９年２月以前に居留地に関係した人たちによるロードレースは開催されておらず、延いては２９年２月８日に国内で最初の自転車ロードレースが開催されたと推察することも可能かもしれません。

（参考資料）

①「日本」　第２３１４号　明治２９年２月１０日発行

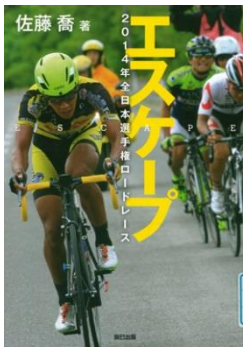
②「THE JAPAN WEEKLYMAIL」　１８９６年２月１５日号
③「石上巡査日記から判明した日本最古の自転車ロードレース」　谷田貝一男　茅ヶ崎市史研究・
　ヒストリアちがさき」第４号　茅ヶ崎市　２０１２年３月
④「自転車全書」　松居眞玄　内外出版協会　１９０２年７月
⑤「COLUMBIA HARTFORD AND VEDETTE BICYCLES 1902」　COLUMBIA FACTORY　１９０２年
⑥「輪友」　第５号　輪友社　１９０２年
⑦「図説横浜外国人居留地」　横浜開港資料館編　有燐堂　１９９８年３月
⑧「明治の巡査日記－石上憲定「自渉録」　茅ヶ崎市史史料集　第１集　茅ヶ崎市　１９９７年
⑨「万朝報」　明治２９年１２月３０日号　１８９６年
⑩「THE JAPAN WEEKLYMAIL」１８９７年１月２日号

最近読んだ新刊本

ＢＣＣ学芸員　谷田貝一男

［レース］

エスケープ　　佐藤喬著　　辰巳出版　　１５００円＋税



２０１４年の全日本選手権ロードレースの様子を、スタート前からゴールまでタイムを表示しながら、実況中継の形で紹介しています。このため主人公は存在せず、レース展開によって登場人物も変わりますが、描き方のコンセプトは一貫して「エスケープ＝逃げる」です。総距離２５２．８キロは国内の通常のレースの倍近くあり、アップダウンが比較的緩やかなコースを、先頭のにげ集団とそれを追う集団とが攻防を繰り広げています。各集団の位置を示したコース図を参考にして文字を追っていくと、思わず先頭集団が逃げ切れるように応援したくなるほどの迫力です。

セカンドウィンド　３　　川西蘭著　　小学館文庫　　７３０円＋税

南雲学院高校自転車部のキャプテンとなった滝口洋は、新任コーチの厳しい指導への不満とインターハイ連覇を義務付けられたプレッシャーによるチームの不協和音の高まりの中に引きこまれていきます。その状況下でも、親友でライバルでもある田村岳との切磋琢磨で成長していきます。レースのコース設定から、選手たちの精神状況・体力状況まで、その描写は詳細であたかも実際にレースを映像で見ているようです。幼友達の佐久間多恵との恋の行方、ヨーロッパに居るらしい母の存在、岳のヨーロッパのプロ選手になるという決意が洋の進路を暗示しています。

自転車少年チャリンコボーイ　　横山充男著　　くもん出版　　１５００円＋税

小学６年生の男子３人が１組のチームとなり、小高い丘や河川敷など変化に富んだ８．５キロのコースを２周する自転車のタイム・トライアルレースがスタートしました。舞台は高知県の四万十川に囲まれた一条市という架空のまちです。男子３人は同じ小学校ということだけが共通で、性格も乗っている自転車もバラバラです。陽気な吉平はマウンテンバイク、転校生でキャプテンの颯太はクロスバイク、聡明な晴美はランドナーです。そんな３人がなんとかチームとしてまとまり、優勝候補の南小学校のチームに挑みます。子どもの純粋な心が自転車を楽しくしてくれます。

［道路］

日本の道路がわかる事典　　浅井建爾著　　日本実業出版社　　１４００円＋税

道路は古来、人を運び、物資を運び、文化をも運んできました。道路をたどれば、歴史と文化が見えてくるというコンセプトに基づいて本書は構成されています。人も歩けない国道・自転車はどこを通ればよいのか等「道路は何のためにあるのかという不思議」。日本の道路整備はなぜ遅れたのか等「道路の歴史」。道路の名称から地域の歴史を紐解くことができる等「道路が伝える歴史と文化」。橋とトンネルはどちらが長いか等「道路にまつわる雑学と疑問」。道路のＩＴ化で交通事故は減らせるか等「日本の道路の進化」。知れば知るほど道路が面白くなる一冊です。

［実践］

土井雪広のロードバイク・トレーニング　　土井雪広著　　東京書籍　　１７００円＋税

ホビーレーサーすなわちプロではないけれどロードバイクが好きで、レースに出場してみたいあるいはレースで勝ちたいという人のために、３大ツールのひとつであるブェルタ・ア・エスパーナャに２年連続完走したプロレーサーによる指南書です。ロードバイクの選び方、乗るときのポジション、トレーニングメニュー、勝つためのレース展開など、プロ選手としてのレース体験を通じて丁寧にかつわかりやすく、あたかも読者を前にして話をしているような構成となっています。まさしく土井雪広が本文中に書いている「ホビーレーサーのためのアシストとなる本」です。

スポーツ自転車でまた走ろう！　　山本修二著　　技術評論社　　１２８０円＋税

自転車の楽しみ方は人それぞれによって異なります。本書ではスピードを求めるのではなく、とにかく自転車に乗って自然や街や出会いを楽しむ、そのための方法を紹介しています。買う前の基本知識、楽しい乗り方・走り方、そして自転車旅と続きますが、いずれも写真を豊富に掲載していますので、駅までの通勤通学や買い物などにしか自転車を利用していない人でも理解しやすくなっています。スポーツ用自転車を思い切って購入し、一生楽しもうと思えるかもしれません。

［紀行］

人生下り坂最高！　　火野正平＋ＮＨＫチームこころ旅著　　ポプラ社　　１４００円＋税

俳優の火野正平さんが芸能人としてではなく、６０歳代のおじさんとしてペダルをまわしながら人や風景と出会う、その様子が読者からの手紙と重なってＮＨＫ「にっぽん縦断こころ旅」という番組の魅力を増しているのでしょう。そんな番組のつくり手として火野正平さんだけでなく、番組スタッフ、手紙をしたためた読者が一体となって本書が作られています。火野さんが坂を気持ちよく下っているとき「人生下り坂最高」とつぶやくそうですが、それは苦ではなく爽快な味がするというのがスタッフの感想です。この感想がそのまま本書に現れています。

［楽しむ］

パリこれ！　　とのまりこ著　　新潮文庫　　４９０円＋税

パリを紹介した本は数多くありますが、本書はこの数多い本とはひと味もふた味も異なるガイドブックです。在仏１３年の著者とその愛犬との会話形式で、住んでみて初めてわかったパリのあれこれを写真入りで紹介しています。チーズやワインなど思わず口が動いてしまう食、かわいいと言ってしまう子どもたちの日常生活、びっくりしたという街の中の人々の行動、日本では考えられないというルールなど、パリという大都市の新たな側面が分かります。ちなみに自転車のことも紹介されています。「適当大王国だけど、自転車ルールには厳しい！？」

地図と愉しむ東京歴史散歩 お屋敷のすべて篇　　竹内正浩著　　中公新書　１０００円＋税

東京の地図を見ていると、特定の地区に大使館や企業迎賓館やホテルなどが集中していることに気付くでしょうか。これらの場所にはかつて華族たちのお屋敷がありました。その邸宅も経済危機や震災や戦争によって多くが消えしまいましたが、現在でも宏壮な豪邸の面影を残しているところもあります。本書には明治大正期の地図にお屋敷のあった位置が示してあり、そのお屋敷跡の現在の様子が写真で紹介されています。しかも巻末には全国の華族１５００の当時の住所と現在の状況リストが掲載されています。これを参考に自転車で現地を訪れてみてはいかがですか。

奇妙な県境６２の不思議　　浅井建爾著　　じっぴコンパクト文庫　　６００円＋税

栃木、群馬、埼玉の３県を徒歩で短時間に簡単に通過できるとして人気があるにも関わらず、その境界線が現在でも不明というところが渡良瀬遊水地の近くにあります。どうしてなのでしょうか。このような不思議な県境の話題を６２のテーマに分けて紹介しています。伊豆諸島はなぜ静岡県ではなく東京都に属するのかなど県境に秘められた歴史、なぜこんなところに県境があるのかという不思議、県境をめぐる争い、まだある県境未定地などが紹介されています。自転車でこうした県境を訪れるのもおもしろいのではないでしょうか。

自転車文化センターは、競輪の補助を受けて事業を行っております。

RING!RING!
プロジェクト